



THE FUKUOKA  
ASIAN CULTURAL PRIZES

第7回  
福岡アジア文化賞  
THE 7th  
FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES

1996

大 賞  
GRAND PRIZE

ワン・チョン シュー  
王 仲 殊

WANG Zhongshu

中国社会科学院考古研究所教授 Professor of the Institute of Archaeology,  
The Chinese Academy of Social Sciences

1925年10月15日生

Born October 15, 1925

中華人民共和国

People's Republic of China



## 略 歴

- 1925 中国浙江省寧波市に生まれる  
1950 北京大学歴史系卒業  
中国社会科学院考古研究所入所  
1952 中国社会科学院考古研究所助理研究員  
1958-62 同研究所学術秘書  
1962-65 同研究所漢唐研究組副組長  
1973- ペルー国立クスコ大学名誉教授  
1978-82 中国社会科学院考古研究所副所長  
1979- 同研究所研究員（教授）  
1979-88 中国考古学会常務理事兼秘書長  
1981- 中国社会科学院研究生院教授  
1982-88 中国社会科学院考古研究所所長  
1988- ドイツ考古学研究所外国人研究員、中国人民政治協商会議全国委員会委員  
1990- アジア史学会評議員  
1993- 中国日本友好協会理事  
1994- 中国社会科学院考古研究所学術委員会主任、  
同研究所「夏竦考古学研究成果賞」評議委員会主任  
1995- 法政大学沖繩文化研究所客員所員

## 主な著作

- Han Civilization*, Yale University Press, New Haven and London, 1982  
『日中古代文化の接点を探る』（共著）山川出版社，東京，1982  
『漢代考古学概説』中華書局，北京，1984（韓国語訳，学研文化社，ソウル，1993）  
『三角縁神獸鏡の謎 日中合同古代史シンポジウム』（共著）角川書店，東京，1985  
『国際シンポジウム古代日本の国際化—邪馬台国から統一国家へ』（共著）朝日新聞社，東京，  
1990  
『三角縁神獸鏡』学生社，東京，1992  
『中国からみた古代日本』学生社，東京，1992

## 贈賞理由

王仲殊氏は、現代アジアを代表する考古学者の一人として、国際的にも高い評価を受けている。同氏は、1925年に浙江省寧波市で生まれたが、1950年に北京大学歴史系を卒業すると同時に、当時の中国科学院考古研究所に入所した。それ以来、一貫して中国大陸各地の重要遺跡の発掘調査に従事し、中国考古学の確立に努力してきた。

研究領域は、主として戦国・秦・漢から隋・唐の時代までを包括し、都城・墳墓・銅鏡などの諸分野において顕著な業績を上げた。研究の手法は、遺跡の発掘を通じて得られた遺構や遺物という考古資料と、比較的豊富に遺存する文献史料を統一的に分析し、論証する点に特徴が見られる。

これまでに同氏が主導した中国考古学史に残る発掘調査には、河南省輝県固圉村の戦国時代中期の魏国の大型墓や、河北省満城県の前漢中期の中山靖王劉勝夫妻墓など数多くあり、それらの研究成果は中国内外の考古学界のみならず歴史学界にも大きな影響力を示した。

また、永年にわたる研究の蓄積を踏まえて、漢代考古学・中国古代都城制と墓制などに関する概説書を著して、啓蒙的な側面でも貢献した。こうして、現在に見るような中国考古学界の発展に指導的な役割を果たしてきたのである。

一方、1972年の高松塚古墳の発見を契機として、王氏は日本の考古学・古代史へ強い関心を寄せるようになった。その結果、三角縁神獸鏡や高松塚古墳、さらには日本古代都城制の源流に関する研究などを通じて、古代の日本と中国の交流史の解明に独自の見解を提起した。特に、日本の前期古墳から出土する三角縁神獸鏡については、卑弥呼の使者が魏の朝廷から下賜されたものとする従来の通説に対して、当時日本に渡来した呉の工人が日本で製作したものであるという新説を提唱するなど、常に斬新で独創的な学説を披瀝して、日本の考古学・歴史学界に大きな衝撃を与えた。

王氏はまた、中国における学術・文化財保護・国際交流などに関わる幾多の要職を歴任してきたほか、日本や韓国における国際会議出席やアメリカの大学での講義などを通じて達成された、中国内外の学問研究の発展と普及、ならびに、後進の育成など多方面にわたる功績は多大である。

このように、王仲殊氏は、中国考古学の体系化はもとより、古代日中交流史の解明に大きな貢献を果たしたばかりでなく、アジアの文化の意義を広く世界に示したと評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい業績といえる。

学術研究賞・国際部門  
ACADEMIC PRIZE : INTERNATIONAL

ファン・フイ・レ

PHAN Huy Le

ハノイ国家大学教授・ベトナム歴史学会会長 Professor of National University of Hanoi  
President of the Association of Vietnamese Historians

1934年2月23日生

Born February 23, 1934

ベトナム社会主義共和国

Socialist Republic of Viet Nam



## 略 歴

- 1934 ベトナム中部のハティン省に生まれる
- 1956 ハノイ師範大学卒業  
ハノイ総合大学（1993年に「ハノイ国家大学」と改称）歴史学部助手および講師
- 1958-88 ハノイ総合大学ベトナム古代・中世史学科主任
- 1973 勤労勲章三等受章
- 1980 首相より正教授に任命
- 1982-84 歴史・民族誌学・考古学中央委員会副議長
- 1987- ベトナム百科事典監修国家委員会委員、ベトナム百科辞書総合編集副主幹
- 1988 「名誉教師」任命
- 1988-95 ハノイ総合大学ベトナム研究協力センター所長
- 1988- ベトナム歴史学会会長、科学技術協会ベトナム人同盟副会長
- 1989- 科学技術政策国家委員会委員
- 1994- ハノイ国家大学学術養成諮問委員会副議長
- 1994 「人民教師」任命
- 1995 勤労勲章二等受章
- 1995- ハノイ国家大学ベトナム研究・交流センター所長、  
ハノイ国家大学社会・人文科学大学東洋研究学部長

## 主な著作

- 『15世紀の土地所有権と農業』文学・歴史・地学出版社，1959
- 『ベトナム封建制度史 第二巻』教育出版社，1960，1962
- 『西山の農民運動』<sup>クイソン</sup>教育出版社，1961
- 『ベトナム封建制度史 第三巻』（監修），教育出版社，1962，1965
- 『ラムソンの民族蜂起（1418-1427）』（共著），社会科学出版社，1965，1969，1977
- 『わが国の軍事的伝統』（監修），外国語出版社，1978
- 『大越史記全書：作者，原典および作品』社会科学出版社，1983，1993
- 『ベトナム史 第一巻』（監修），大学出版社，1983，1985，1991
- 『ゲティン：昨日と今日』（監修），真理（Verity）出版，1985
- 『潘輝注<sup>ファンフイチュウ</sup>海程誌略』（共著）アソシエーション・アーキベル，パリ，1994
- 『首都昇龍-ハノイの歴史』<sup>クンロン</sup>（共著）国立政治出版，1995
- 『ハドンの地簿』（監修）ベトナム協力センター，1995
- 『バッチャンの陶器』（監修）世界出版，1995
- 『伝統的価値観と現代のベトナム人』（監修）第一巻，1994，第二巻，1996

※出版地のないものは、ハノイにて出版。

## 贈賞理由

ファン・ファイ・レ氏はベトナムを代表する最も著名な歴史学者で、ハノイ国家大学で教鞭をとるかたわら、ベトナムを代表して国際学会や会議に参加し、国際交流を含めて幅広い分野で目覚ましい活躍を行っている。特に1980年代から人文科学分野での「ドイモイ(刷新)」を推進し、ベトナムを社会経済史の分野から考察し、理論構築を行い、これまでのベトナム史を塗り替えるほどの新境地を拓いたといわれている。

レ氏は1934年ベトナム中部のハティン省で生まれ、過去に高名な文紳を送り出した地方の名家がその出自である。1956年にハノイ師範大学を卒業し、同年ハノイ総合大学歴史学部に助手として採用された。1975年までは同国のアカデミズムにとって非常に困難な時代だったが、それでも1988年までの32年間にわたり膨大な資料に基づくベトナム社会経済史研究に取り組み、着々と成果を上げ続けた。さらに数多くの優秀なベトナム史学の研究者を養成し、1975年以降は外国人大学院生の指導に当たり、10人あまりの日本人研究者が氏から直接の指導を受けてきた。

レ氏の温厚な人柄とイデオロギーにとらわれない学風は、東南アジア各国・日本・フランスなどで高く評価されており、パリ第7大学、アムステルダム大学に招聘され、講義を行ってきた。同氏はこれまでベトナム史の中で見落とされてきた社会経済史に焦点を当て、その労作『ベトナム封建制度史』を著し、新しい視座からベトナム史再考のきっかけを作った。氏は農村の地簿、家譜などの村落文書、さらに阮朝<sup>グエン</sup>の硃本(皇帝が上奏文に朱を入れた史料)などの重要な史料を丹念に発掘し、多くの新知見をもたらすと同時にその先駆的な学術業績は国際的に広く知られ、高い評価を得ている。特に氏の研究業績は、地主制度や農村の社会経済構造、伝統文化などを中心に200あまりの論文と14冊の著作にまとめられている。併せて教科書執筆など地道な仕事を行っている。

レ氏は、1990年3月にベトナム中部ダナン市において日本とベトナムが中心となった「17世紀日本人町ホイアン」の国際学術シンポジウムを主催し、学術研究における「ベトナム開国」を最も早く推進した教授として知られている。以後日本とベトナムの学術協力の具体的な果実であるホイアン日本人町研究と町並み保存事業においてベトナム側の責任者の一人となっている。また1988年以降、ベトナム歴史学会会長を務める等、多くの要職も歴任している。現在、ベトナム研究の国際化は同氏の存在を抜きにしては語り得ないし、その役割は今後一層重要になろうとしている。

このようにファン・ファイ・レ氏の功績はベトナムの社会経済史学の発展に大きな貢献を果たしたばかりではなく、アジアの伝統的農村社会の研究の意義を広く世界へ示したと評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞・国際部門」にふさわしい業績といえる。

学術研究賞・国内部門  
ACADEMIC PRIZE: DOMESTIC

え とう しん きち  
衛 藤 藩 吉

ETO Shinkichi

東京大学名誉教授・前亜細亜大学学長

Professor Emeritus of the University of Tokyo  
Former President of Asia University

1923年11月16日生

Born November 16, 1923

日 本

Japan



写真撮影：長友健二  
Photo: courtesy of Nagatomo Kenji



## 略 歴

- 1923 中国瀋陽に生まれる  
1948 東京大学法学部政治学科卒業  
1948-52 東京大学東洋文化研究所助手  
1952-56 東京工業大学助教授（政治学担当）  
1956-67 東京大学教養学部助教授（国際関係論担当）  
1961-63 米コロンビア大学東アジア研究所高級研究員  
1966 第1回吉野作造賞受賞  
1967-84 東京大学教養学部教授（国際関係論担当）  
1970-71 プリンストン大学客員教授  
1982 ハワイ大学客員教授  
1983-85 アジア政経学会理事長  
1984-87 青山学院大学教授（国際関係論担当）  
1984- 東京大学名誉教授  
1987-95 亜細亜大学、日本経済短期大学学長  
1991 紫綬褒章受章  
1995- 亜細亜大学名誉教授・客員教授

## 主な著作

- 『無告の民と政治』東京大学出版会，1966（新版1980）  
『近代中国政治史研究』東京大学出版会，1968（新版1975）  
『東アジア政治史研究』東京大学出版会，1968（新版1979）  
『日本の進路』東京大学出版会，1969（新版1980）  
『日本をめぐる文化摩擦』（編著）弘文堂，1980  
『現代中国政治の構造』（編著）日本国際問題研究所，1982  
『国際関係論』（共著）東京大学出版会，1982（改訂版1989）  
*My Thirty-Three Years' Dream: The Autobiography of Miyazaki Toten,*  
(translation with Marius B. Jansen) Princeton, Princeton Univ. Press, 1982  
*The 1911 Revolution in China* (co-ed.), Univ. of Tokyo Press, 1984  
『鈴江言一伝』（共著）東京大学出版会，1984  
『佐藤栄作』時事通信社，1987  
『学長の鈴』読売新聞社，1988  
『個性値教育のすすめ』ごま書房，1989  
『総合安保と未来の選択』（共著）講談社，1991  
『二流のすすめ』講談社，1993  
*China's Republican Revolution* (co-ed.), Univ. of Tokyo Press, 1994

※出版地のないものは、東京にて出版。

## 贈賞理由

衛藤藩吉氏は、中国近現代の政治史や外交史及び国際関係論の分野において、日本を代表する最も著名な学者の一人である。数多くの優れた研究成果は日本の学界のみならず、アジアや欧米においても高い評価を受けている。同氏はまたオピニオン・リーダーとして、永年の学問的業績を背景に日中関係を中心として日本外交の進路についても提言し、さらには国際的な学会や研究機関との学術交流の促進にも指導的な役割を果たしてきた。

1923年、中国東北部の瀋陽に生まれた同氏は東京大学法学部を卒業し、東京工業大学助教授を経て、東京大学教養学部助教授から教授を歴任した。この間、中国近現代の外交史研究を進める中で、新中国の政権を担う中国共産党の歴史的理解の重要性に着目し、共産党による革命運動史の実証的研究にいち早く取り組んできた。1927年に広東省の海豊・陸豊で樹立された中国初の「ソビエト」に共産党による農民運動の萌芽を発見した同氏の研究論文は、中国共産党史研究の先駆的業績として、日本のみならず欧米の学界においても注目された。この論文を含めて同氏の中国近現代史研究は、『近代中国政治史研究』や『東アジア政治史研究』にまとめられている。

衛藤氏は中国政治史の研究を引き続き進めるとともに、関心は広がり、一つには日本のアジア外交に及んでいった。この面については、『無告の民と政治』をはじめとした多くの著書や論文にまとめられ、1966年には第1回の吉野作造賞を授与された。いま一つに、研究関心は中国を含めたアジア地域に広がり、1970年代末には国際交流における「文化摩擦」の概念を提唱し、大規模な共同研究「東アジア及び東南アジアにおける文化摩擦」を組織して、研究の活発化と精緻化に貢献した。その成果は、10冊を超える研究報告書に結実している。

衛藤氏はまた、日本のアジア研究者の最大組織であるアジア政経学会の常任理事や理事長を歴任するなど、多くの学会で指導的役割を果たし、アジア研究や国際関係論の研究水準の向上に貢献するとともに、数多くの優秀な研究者を指導・育成してきた。さらには永年にわたって学術面の国際交流にも尽力し、特に中国をはじめとしたアジアとの学術交流の発展に寄与してきた。

このように、衛藤藩吉氏のアジア近現代の政治史と国際関係論の研究における多大な業績と国際的貢献はまことに大きく、まさしく「福岡アジア文化賞－学術研究賞・国内部門」にふさわしいといえる。

芸術・文化賞  
ARTS AND CULTURE PRIZE

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン Nusrat Fateh Ali Khan

カッターリー歌手 Qawwali Singer

1948年10月13日生 Born October 13, 1948

パキスタン・イスラム共和国 Islamic Republic of Pakistan



## 略 歴

- 1948 パキスタン、パンジャブ州ファイサラバード市の伝統的なカッワール（カッワールリーの歌い手）の家に、長男として生まれる。
- 1964 高名な音楽家であった父ファテ・アリー・ハーンの死を機に、カッワールになることを決意、3人の叔父から本格的な訓練を受ける。父のチェヘルム（40日忌）の儀式でデビュー。
- 1971 叔父の死によりグループのリーダーになり、本格的な演奏活動を開始。
- 1975 「アミール・フスロー生誕700年祭」で演奏し、第1位を獲得。
- 1979 インドのムーヌッディーン・チシュティー廟を参詣、廟内での演奏を許可される。インド亜大陸の著名な芸術家・文化人の前で演奏（外国での初演奏）。
- 1980 初めてノルウェー、デンマーク、イギリスのパキスタン人社会で公演（以後、恒例となる）。
- 1985 ロンドンで開催されたワールド・ミュージックの祭典「WOMAD(ウォーマッド)」に出演し、大きな反響を呼ぶ。第1回パリ公演（テアートル・ド・ラ・ヴィル）。
- 1987 国際交流基金の招きで初来日、「第5回アジア伝統芸能の交流」のセミナーと公演に参加。パキスタン政府から芸術部門の大統領賞を受賞。
- 1988 第2回パリ公演。米映画「The Last Temptation of Christ（最後の誘惑）」（マーティン・スコセッシ監督）のサウンドトラックの一部で演奏。
- 1990 2度目の来日公演。
- 1991- イムラーン・ハーン癌病院、エーディー基金、アーガー・ハーン病院のための数多くのチャリティー公演を行う（米、英、独、ノルウェー、ケニア、湾岸諸国等々）。
- 1991 日本で初めて開催された「WOMAD」祭に参加。
- 1992 3度目の来日公演。「WOMAD92横浜」に参加。
- 1992-93 米国ワシントン大学客員教授。ウィスコンシン大学でも講義と演奏。
- 1994 インド映画「Bandit Queen」（シェーカル・カプール監督）で音楽監督。米映画「Natural Born Killers」（オリヴァー・ストーン監督）のサウンドトラックの一部で演奏。
- 1995 米映画「Dead Man Walking」（ティム・ロビンズ監督）のサウンドトラックの一部で演奏。ユネスコ国際音楽評議会賞受賞。
- 1996 インド映画のサウンドトラック。

### 主な作品 （日本で発売されたCDとビデオのみ）

#### <CD>

- 「法悦のカッワールリー（I）」ビクター音楽産業、1988
- 「法悦のカッワールリー（II）」ビクター音楽産業、1989
- 「ショーハン・ショー」ヴァージン・ジャパン、1989
- 「情熱の炎」ヴァージン・ジャパン、1990
- 「シャバズ」ヴァージン・ジャパン、1991
- 「シュープリーム・コレクション」日本コロムビア、1991
- 「イエ ジョー ハルカー ハルカー」日本コロムビア、1991
- 「神秘詩集 Vol.1」東芝EMI、1993
- 「神秘詩集 Vol.2」東芝EMI、1993
- 「究極のパリ・コンサート（1）」キング・インターナショナル、1994
- 「究極のパリ・コンサート（2）」キング・インターナショナル、1994
- 「究極のパリ・コンサート（3～5）」キング・インターナショナル、1994
- 「サーンソーン・キ・マーラー」日本コロムビア、1995

#### <ビデオ>

- 「音と映像による世界民族音楽大系」南アジア篇 日本ビクター、1988
- 「ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン：Live in Paris 1988」MSI、1991

## 贈賞理由

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン氏は現在、世界で最も華々しく活躍しているパキスタンの代表的歌手である。生家は600年にわたってインド亜大陸のイスラーム宗教歌謡カッワーリーを伝えてきたグワーリヤル派の家柄で、父も叔父も名高い音楽家であった。氏がカッワーリーを本格的に学び始めたのは父の死後だったが、1965年にグループを率いる主唱者としてデビューして以来、徐々にカッワール（カッワーリーの歌手）としての頭角を現し、今日では「カッワーリーの帝王（シャハンシャー）」と呼ばれるに至っている。演奏会だけでなく、本来の姿である国内の聖者廟での奏樂を続ける中、1979年にはインド亜大陸で最も権威あるスーフィー聖者ムイーヌッディーン・チシュティー廟（インドのアジュメール）内で歌うことを許されるという栄誉を得た。同氏は卓越した歌唱力と音楽性を備え、また、ウルドゥー語や母語のパンジャービー語のほか、ペルシア語などさまざまな言語による神秘詩を自在に歌い分け、数千曲ともいわれるレパートリーの広さは他に類を見ない。1987年にはパキスタン政府から音楽部門での大統領賞を受賞、その他数多くの賞を獲得している。

一方、1985年夏、ロンドンで開催されたワールド・ミュージックの祭典「WOMAD（ウォーマッド）」に参加し、大きな反響を呼んだのをきっかけに、ヌスラット氏はジャンルを超えた幅広い音楽活動を展開し始めた。スキヤット風な即興など数々の実験的な試みを導入して、カッワーリーに新しい息吹を与え、地域やジャンルを超えてさらに広く親しまれるものにした。1985年と1988年のパリ公演も大成功をおさめ、欧米でもその豊かな音楽的感性は熱狂的な支持を得た。日本には1987年、国際交流基金の招聘で初来日し、「第5回アジア伝統芸能の交流」のセミナーや公演に参加して以来、来日公演は3回を数え、確実にファンを増やしている。大規模な公演を成功裡にこなす一方、日本版CDも多数出している。

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン氏はこのように、カッワーリーの伝統の継承と発展に大きく寄与し、南アジアが誇る伝統音楽文化を世界に知らしめたばかりでなく、伝統にとらわれない柔軟性と芸術的感性によって革新をもたらすなど、東西文化の相互交流と発展に与えた影響は計り知れないものがあり、まさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい業績といえる。

## 公式行事スケジュール

行 事	日 時	場 所
○授 賞 式	9月26日(木) 午後2時30分～3時30分	福岡サンパレス
○記 者 会 見	9月26日(木) 午後4時～5時	福岡サンパレス
○祝 賀 会	9月26日(木) 午後6時30分～8時	ホテル日航福岡
○記 念 講 演 会	9月27日(金) 午後6時～8時	アクロス福岡イベントホール
○ワークショップ		
・古代史研究フォーラム 「三角縁神獣鏡と邪馬台国」	9月27日(金) 午後1時30分～4時	福岡市役所15階講堂
・ベトナム21世紀フォーラム 「21世紀ベトナムのダイナミズム」	9月28日(土) 午後12時30分～3時	福岡市役所15階講堂
・アジア交流の未来フォーラム 「明治の日本人・平成の日本人」	9月28日(土) 午後4時～6時30分	福岡市役所15階講堂
・イスラーム宗教讃歌コンサート 「カッワーリーの神髄」	9月28日(土) 午後7時～9時	福岡銀行本店大ホール

## 授 賞 式

日 時：9月26日（木） 午後2時30分～3時30分  
場 所：福岡サンパレス

1996年（第7回）福岡アジア文化賞授賞式は、在日アジア各国大使御夫妻、留学生、学術・教育・芸術・文化関係者及び市民等約800名の参加を得て開催された。式典では選考経過報告や贈賞理由説明の後、主催者による贈賞が行われ、受賞者の生い立ちや素顔、研究・芸術活動の一端を家族や研究者仲間等との写真スライドで紹介するなどにより、受賞者の業績を讃えた。

各受賞者は、その挨拶の中で受賞の喜びや、福岡市及び福岡アジア文化賞へのメッセージ、アジアに対する思いなどを語った。なお、ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン氏は、健康上の理由で来日できなかつたため、ナヒード夫人による代理受賞となった。

また、来賓による祝詞が述べられ、ヌスラット氏の弟ファルーク氏及び甥のラハット氏を中心とするグループによるカフワーリーの演奏も行われた。

### PRIZE PRESENTATION CEREMONY

Date & Hours: 2:30-3:30 pm Thursday September 26, 1996  
Venue: Fukuoka Sun Palace

The Prize Presentation Ceremony of the 7th Fukuoka Asian Cultural Prizes 1996 was held with the participation of approximately 800 people, including Ambassadors of Asian countries and their spouses in Japan, exchange students in Fukuoka, other concerned parties from the fields of education, arts and culture, and citizens of Fukuoka. Following the presentation of the screening process summary and the citation for awards, each of the recipients was conferred their prize by the organizing committee representatives. As the achievements of each recipient were praised, their early days, profiles and photos taken with their families and colleagues were introduced with slides.

Each of the recipients related their joy upon receiving the prizes in their acceptance speeches and expressed their views on the Fukuoka Asian Cultural Prizes, Fukuoka City as well as Asia in general. Since Mr. Nusrat Fateh Ali Khan, the recipient of the Arts and Culture Prize was unable to come to Fukuoka due to an unforeseeable health problem, Mrs. Naheed, wife of Mr. Nusrat, accepted the prize on behalf of her husband.

In addition to the speeches by guests, a special musical performance of qawwali was given by Mr. Nusrat's younger brother, Mr. Farrukh Fateh Ali Khan, and nephew, Mr. Rahat Ali Khan.





ヌスラット氏の弟ファルーク氏及び甥のラハット氏を中心とするグループによるカッワーリーの演奏  
Performance of qawwali music by a group led by Mr. Nusrat's brother, Mr. Farrukh, and nephew Mr. Rahat Ali Khan



授賞式フィナーレ（全景）  
Prize Presentation Finale



## 受賞者挨拶



王 仲 殊

このたび「福岡アジア文化賞」の大賞をお授けいただき、心から嬉しく、また光栄に存じております。福岡アジア文化賞委員会の皆様、そして福岡市桑原敬一市長に対し深く感謝申し上げます。

私の研究領域は中国の漢・唐時代の考古学と、また同時期の日本の考古学および古代史を兼ねたものです。特に1980年代の初期からは中日両国の古代交流史は私の主要な研究テーマとなりました。福岡は古くから日本と中国の交流の重要な中心地で、両国の文化はここで出会い、融合し輝かしい光を放ちました。ですから私が幸いにも福岡市で「福岡」の名を冠したアジア文化賞を受けることができますことは、とりわけ深い意義があると思います。

日本の学界で中国の考古学や古代史を研究する学者は大勢おられます。それに比べて、中国の学者で日本の考古学や古代史を研究する人は不足しているように思われます。私は中国社会科学院考古研究所で所長を務めていた頃から日本考古学と古代史への研究を強化するよう提唱し始めました。若い世代を養成し、彼らに中国の考古学を研究すると同時に日本の考古学と古代史の研究にも注意を向けるよう指導しました。私はいつも中日両国の学者が学術研究の面で力を合わせ、一緒に前進することを念願していました。

もちろん、中国と日本以外の国々の学者とも学術研究面の交流を強め、アジアの優れた文化の伝統をよりよく発展させていかねばなりません。最近、中国、日本、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、モンゴル5カ国の学者が参加してアジア史学会第6回研究会が北京で開かれ、実り多い成果を上げましたが、これは私たちを大いに激励するものでした。

私は今回の福岡アジア文化賞の受賞は私に対する励ましであり今後引き続き努力してより多くのより良い研究成果をあげるように促すものであると受け取っております。古代の中国と日本の往来における数々のすばらしい情景をなつかしく偲びつつ、両国人民の友誼が絶えることなく永久に続いていくよう願ってやみません。





ファン・ファイ・レ

福岡アジア文化賞は、アジア研究の発展及びアジアの国々との友好関係と文化交流の発展を促進するという大きな価値ならびに大きな意味をもっています。私たちアジアの国々の社会的経済的前進を押し進める、相互理解の基本だと思います。

このことに鑑み、ベトナムの研究者としてはじめてこの賞をいただくことは、私にとって大きな栄誉であります。ベトナムと日本、そして他のアジアの国々との文化的学術的協力関係を絶え間なく発展させるという、私自身はもちろんベトナムの同僚たちの責任を感じております。

福岡アジア文化賞の授賞式にあたり、妻ともども、福岡市長ならびに文化賞委員会の皆様に対し、心からまた厚く感謝申し上げたいと存じます。

御列席の皆様方の御健勝をお祈り申し上げます。





衛藤 審吉

この度ははからずも福岡アジア文化賞を頂戴致しまして、まことにありがとうございます。大変光栄に存じます。福岡アジア文化賞創設時以来変わらぬ御支持を下さっている桑原敬一市長はじめ市民の皆様、そして今日運営の責任にあたっておられる川合辰雄理事長以下事務関係者の皆様、アジアに目を向け、アジアの文化を尊重して下さる卓見に対して、深く敬意を表するものであります。

顧れば、筑前は高場乱の興志塾以来、革新の急先鋒となる人傑相継ぎ、玄洋社社員の面々はその情熱に燃える血を、或いは自由民権運動に、或いは朝鮮、清朝の革命革新にたぎらせたのは、人のよく知るところであります。狂乱怒涛の昭和前半期、祖国の苦難興敗を経験してより、今なお筑前福岡に脈々として鼓動を続けている輝くアジアへの情熱が、ここに福岡アジア文化賞となり、平和な文化の振起発揚への御努力となって花開いたものと拝察致します。

私自身、戦いに敗れた直後、学問の世界にだけは勝者も敗者もあるまい、と学問研究に志し、社会科学的手法で19世紀のアジア史の分析を試みました。さらに進んで国際社会の複雑な現象を分析するには、歴史学、経済学、心理学、政治学、或いは動物行動学など必要とする学問の手法を勉強し、それをインターディシプリナリー（学際的）に駆使することが必要だと痛感し、今日の東京大学教養学部国際関係論分科の学問研究体系に新しい血を盛ることに全力を尽くして参りました。

この度の受賞の光栄も、「桃李、花天下に遍し」と人にいわれる程多くの教え子たちに負うところが多いと思いますし、私の学風を継いで、立派な研究者や社会人に育ってくれた教え子たちのお蔭であります。そのなかには私の学問水準をはるかに凌いで活躍している者も少なくありません。私はこれらの教え子たちを誇りに思います。

孟子の中に「士は窮して義を失わず、達して道を離れず」とあります。今日の栄誉に遇っても、決して教育と学問の道を踏みはずさぬよう努め続けたいと決心しております。

ありがとうございました。



ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン

(ナヒード夫人代読)



福岡市長ならびに福岡アジア文化賞委員会の皆様、御列席の皆様。

福岡アジア文化賞を受賞いたしましたことは、私にとっては大変な榮譽であります。

この賞は、私の芸術へのこれからの励みになるだけでなく、私たちの国、ましては私たちの文化に対しての評価だと考えております。私に、また私たちの国にこの賞を与えて下さいましたことを、パキスタン国民になりかわりまして、心からお礼を申し上げます。福岡アジア文化賞が目指すところは崇高で、また大変評価できるものだと思います。人類の友情、平和、アジアの国家間の相互の親近感、また、アジア諸国の文化の振興にとって福岡アジア文化賞は、称賛に値するものだと思います。この賞により、アジア諸国間に平和や友情といったすばらしい雰囲気が生じるだけでなく、アジア諸国の文明や、社会にとって真の宝である文化の保護・振興がなされることになると思います。

御列席の皆様。

世界の四方に目を向ければ、人々が不安や心の病いに悩まされているのが良く分かります。機械に囲まれた生活に追われ自らも1台の機械になってしまっているかのようです。物質至上主義のこの世の中で、人の精神は病み、死んでしまったも同然です。これを癒すことができるのは、今日人類が忘れてしまっている芸術・文化しかありません。人類に、自ら忘れてしまった文化へ再び目を向けさせるためにも、福岡アジア文化賞はすばらしい、また大変重要な一歩なのです。芸術・文化の発展と振興のために福岡アジア文化賞が果たす役割は、人類の歴史に残ることでしょう。

福岡アジア文化賞の御発展を祈り、最後にもう一度この場をお借りしまして、今回の受賞に対してお礼を申し上げます。



## 記念講演会

日 時： 9月27日（金）午後6時～8時  
場 所： アクロス福岡イベントホール  
参加者： 約700名

### 1 王 仲 殊氏「古代中日両国の交流から見た日本文化」

王仲殊氏は、悠久の歴史を持つ、日本と中国との文化交流で日本側の窓口となってきた福岡に特に思い入れが深いことから始め、古代から続く日中交流の歴史をたどりながら、中国及び日本の考古学や文化の研究について次のように語った。

まず、日本列島で最初に弥生時代に入った福岡を中心とする九州北部では、日本最古の水田跡等が発見されており、古代中日交流史を専門とする研究者として福岡に格別の思いを抱く理由の一つがそこにあること。また、自らの論文により、福岡市志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印は漢の光武帝が贈ったものに違いないとされるようになったこと。3世紀邪馬台国時代の海の玄関であった伊都国をしのび、前原市の伊都歴史資料館に漢詩を贈っていることなどを語った。

次に王氏は漢詩の手ほどきをしてくれた父の勧めで、大学では古代史を専攻したが、第二外国語として選んだ日本語の優美さに引きつけられ、最初は日本文学に熱中、さらに日本の古代史にも注目するようになった。大学卒業後、中国社会科学院考古研究所で、漢・唐の考古学研究を中心に日本考古学を学ぶことにより、中国文化の影響を受けながら、民族的特色を失うことなく発展してきた日本文化に、深い興味を覚えるようになった。王氏の日本訪問は1981年以来15回を数え、日本考古学や歴史学についての独自の見解は、時に称賛、時に反論を受けたが「学問に国境なし」の原則により、真摯に日本学界と交わり論争を重ねてきた。「称賛されても驕らず、反対があっても自信喪失せず」が自分の一貫した研究態度であると述べた。

最後に、王氏は、現代日本文化は、西洋文化の影響を受けながらも依然として、古来の民族の伝統を留めていると語り、考古学だけでなく日本の文化にも深い知識を示して、島根県松江市にある小泉八雲の旧居を訪ねた時に作った短歌を披露して講演を結んだ。



## 2 ファン・ファイ・レ氏「私の歴史への道」

ファン・ファイ・レ氏は、歴史学者としての人生を次のように語った。

ベトナムで儒学者の家庭に生まれ、幼い頃、家では漢字を、学校ではベトナム語とフランス語を学んだ。中学時代に数学と物理学に興味を持ち、当時唯一の大学に入学したが、希望していた理系のクラスは既に満員で、文系にしか進めず残念だった。しかし、その後ハノイ師範大学の良い環境でさらに歴史を学ぶうちに、心から歴史の勉強が好きになってきた。1956年にハノイ総合大学（後にハノイ国家大学と改称）の講師となって自分の著作が出版されるようになると、歴史学者になったのは偶然ではあったが、歴史研究をライフワークにしたいと思うに至った。

ベトナム戦争が北部に広がると大学は山間部に疎開し、勉強道具にも不足したが、かえって学生とともに北部地方をくまなく調査する機会を得た。多くの村落史料を発見、収集するなどの成果をあげることができた。戦時中はベトナムの反侵略史を主な研究課題としていたが、これは祖国が独立と統一の獲得のために戦っている間、歴史家に課せられた使命だったと信じている。戦後は、社会経済や文化問題を中心とした研究に復帰。現在は、村落史、村落における土地所有権やベトナム伝統文化継承問題の研究に取り組んでいる。

戦時中、世界から孤立していたことは、ベトナムの歴史研究に負の影響を与えた。私はベトナム歴史学会会長として、全力を尽くして海外の歴史学者との接触、協力関係を広げ、この遅れを取り戻して、ベトナムの学者が国際的な活動ができる環境を作ろうとしている。

教鞭を取って40年間、毎日、若く素晴らしい世代の学生たちに触れるという良い環境に恵まれてきた。好きな言葉は「学ぶことは少しも疲れず、教えることは少しも退屈ではない」。学術研究、研究者の育成そして国際協力は、きわめて重要な相関関係にある。学術交流を通して、歴史学研究をさらに発展させることができると述べて講演を結んだ。



### 3 衛藤 藩吉氏 「医者になりたかった私」

衛藤藩吉氏は、医学を志しながらも、結局文系に進み大学は法学部を卒業した後、国際関係研究者としてインターディシプリナリー（学際的）に学問研究を進めてきたこと等を次のように語った。

衛藤氏は、熊本出身の父母のもと、満洲（今の中国東北部）で育った。多感な中学時代、奉天（今の瀋陽）で生涯医療と伝道に身を捧げたキリスト教宣教師デュガルド・クリスティーの自伝やキューリー夫人伝の影響で医者を目指すようになった。医者は人間を対象とするので、人間について勉強する必要があると考え、九州帝国大学医学部を志望したが、医学部受験について両親に反対され、結局、東京帝国大学法学部に入り卒業した。その間、広島で被爆し、復員後は、学問の道には勝者も敗者もないだろう、学問でアメリカ人を負かせて見せようと思ひ恩師の勧めもあって中国の政治史を研究するようになった。そして東京大学東洋文化研究所で多くの著名な学者の影響を受けながら、清末の中国が欧米近代の圧力を受けて、いかに変容してきたかという課題を研究したと述べた。

次にこの研究の過程で、国際社会で起きるような複雑な現象は、単一の専門の研究手法では解決しない。新しい複雑な問題に取り組むときは、自分の専門以外であってもそれに必要な新たな専門の研究手法を学びとるべきである。そのような柔軟な頭脳こそが国際関係を研究する者の最も大事な財産であると考え、東京大学における国際関係教育においては、専門の研究手法を特にうたうことなく、社会諸科学、歴史学等の基礎を十分に勉強して柔軟な頭脳で社会に出てもらうよう努力してきた。そして、最近、亜細亜大学学長として、大学教育そのものをインターディシプリナリーに研究し大学改革に努力してきたと語った。

最後に、衛藤氏は、多くの柔軟な頭脳を持った学生、卒業生、研究者たちが周りにいて、柔軟な学問への総合的アプローチを実践してくれていることに大きな満足と喜びを感じると語り、今日人類が直面している課題は、インターディシプリナリーなアプローチでなければ解け得ないものが増えており、いっそうインターディシプリナリーな教育と研究の必要性を痛感していると述べて講演を結んだ。



#### 4 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン氏 「神へのメッセージを歌う」

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン氏は、自らの生い立ちやカッワーリーの起源、カッワーリーについての自らの考え方などについて次のように語った。

私の先祖は600年程前にアフガニスタンのガズーニーからパンジャーブのジャーランダル（現在はインド領）に移住してきた。先祖には、イスラーム神秘主義に傾倒してドゥルバドやハヤールという古典音楽を得意にした系統と、古典音楽だけでなくカッワーリーを学んだ系統の2つの音楽ジャンルが流れており、父方母方の祖父、父、叔父みな古典音楽家である。普通カッワーリーは古いものは詩だけで、歌い方は古典の要素が必要でないといわれているが、我が家系は古典を重視し過去のイスラーム神秘主義の指導者達の言葉を、古典的な歌い方で歌ってきた。

最近、欧米など世界中で演奏しているが、国外で歌うときは、「音楽は世界の共通語」という観点で、旋律を前面に出し、詩を少なくして古典的声楽に重きを置き、国内では詩に重点を置いている。

カッワーリーの演奏中に聴衆が泣きだし自分たちも泣いてしまったり、聴衆が陶醉状態に陥り忘我の状態になると同じように、自分が別の世界において、歌の中の偉大な存在が目の前に表れその人に語りかけているように感じたことがある。カッワーリーを聞くことで数年にわたる修行を経てからでないと昇ることのできない神秘主義の階段を瞬時に昇ることができる。カッワーリーは礼拝の一部であり、神の存在、神の真理、神の知識、神の法へ自分自身を到達させるための有力な手段であると語った。

また、西洋楽器を使っのポップ調の曲の演奏に対し、保守的な年配層から邪道との意見が聞かれることに対しては、カッワーリーを良く知らない若い世代に聞かせる目的で西洋楽器を導入したのであって時代の要請に応じてほんの少し変化を加えただけであり、作曲については1曲作るのに数時間かかることもあれば、10分ほどで3、4曲できることもあると述べた。

そして今後は、カッワーリーが国際的地位を得られるような教育機関を創設し、先代から引き継いだものを次代の弟子たちに引き継ぎたいと力を込めて語った。

(※記念講演会では、1996年5月パキスタン・ラホールでのインタビューを収録したビデオを上映した。)





## 古代史研究フォーラム

日 時： 9月27日（金）午後1時30分から4時

場 所： 福岡市役所15階講堂

参加者： 約500名

1 テーマ 「三角縁神獣鏡と邪馬台国」

2 プログラム

基調講演 福岡アジア文化賞大賞受賞者 王 仲 殊

問題提起 奈良県立橿原考古学研究所所長 樋口 隆康

対論 王 仲 殊

樋口 隆康

コーディネーター

九州大学文学部教授

西谷 正

3 概 要

王氏は、中国・韓国の銅鏡発掘調査の成果と日中両国で出土した銅鏡の精緻な比較分析に基づき、日本の考古学界において、紀元3世紀に邪馬台国の女王・卑弥呼の使者が魏の皇帝から下賜された100枚の銅鏡、いわゆる「卑弥呼の鏡」と呼ばれる三角縁神獣鏡が、定説とは異なり、当時日本に渡来した呉の工人によって日本で作成されたものという自説を展開した。

これに対し、樋口氏は数々の銅鏡の貴重な写真や遺跡発掘現場の写真のスライドで紹介しながら、考古学研究の方法論にも触れ、銅鏡作成技術が大陸から日本へ伝わった歴史的背景を踏まえて、三角縁神獣鏡は、日本側の依頼により魏で作成されたとする「特鑄説」を主張した。

日中を代表する考古学研究者が初めての対論の中で、三角縁神獣鏡と邪馬台国をめぐってそれぞれの立場と学説の同意点及び相違点を明確にし、今後とも実地調査と学術交流によって、この問題の議論を深め真実を追求していくという研究姿勢を確認した。



樋口 隆康 氏  
Professor Higuchi Takayasu



西谷 正 氏  
Professor Nishitani Tadashi

## ベトナム21世紀フォーラム

日 時：9月28日（土）午後12時30分～3時

場 所：福岡市役所15階講堂

参加者：約150名

1 テーマ 「21世紀ベトナムのダイナミズム」

2 プログラム

基調講演 福岡アジア文化賞学術研究賞国際部門受賞者 ファン・ファイ・レ

問題提起 都留文科大学文学部教授 小倉 貞男

パネル・ディスカッション

パネリスト ファン・ファイ・レ

小倉 貞男

北海道大学法学部教授 坪井 善明

コーディネーター

上智大学外国語学部長、教授 石澤 良昭

3 概要

基調講演において、レ氏は歴史学の見地に基づき、人間と文化という2つの側面からベトナムの原動力の各要素を取り上げて分析。近代化・工業国化を目指すベトナムの目下の課題は、内的要因を最大限に引き出し、科学技術や資本等の外的要因を取り入れ、総合的に発展させていくことだと述べた。引き続いて小倉氏は、ベトナムの村落共同体意識の問題、ドイモイの国際化、ベトナムの発展モデルの3点を提起。その後のディスカッションでは、坪井氏がベトナム戦争、自然を愛する詩心などについてコメントしたのち、さらに踏み込んだ討論が展開された。最後は各パネリストが、「急がずゆっくり格差なく発展するモデルを作りたい」（坪井氏）、「ベトナムはアジアの中でベトナム・モデルというのを作るのでは」（小倉氏）、「将来、ベトナムは他のアジア諸国と協力しながら、アジアの発展の中で大きな役割を果たすことができる」（レ氏）と、それぞれ述べて終了した。



小倉 貞男氏  
Professor Ogura Sadao



坪井 善明氏  
Professor Tsuboi Yoshiharu



石澤 良昭氏  
Professor Ishizawa Yoshiaki

## アジア交流の未来フォーラム

日 時：9月28日（土）午後4時～6時30分

場 所：福岡市役所15階講堂

参加者：約250名

1 テーマ 「明治の日本人・平成の日本人」

2 プログラム

基調講演 福岡アジア文化賞学術研究賞国内部門受賞者 衛藤 藩吉

コメント 評論家 松本 健一

パネル・ディスカッション

パネリスト

衛藤 藩吉

松本 健一

東京大学教養学部教授

古田 元夫

亜細亜大学教養部助教授

容 應 萸

コーディネーター

慶應義塾大学総合政策学部教授

小島 朋之

3 概要

衛藤氏が「明治の日本人と平成の日本人とはどこが違うべきなのか」「これからアジアとの関係を築いていく場合、どのようなタイプの日本人が求められているのか」等について基調講演で述べたのを受けて、松本氏は、明治、特に幕末期の日本人に焦点を当て、大東亜戦争を起こした昭和を経て「第3の開国期」に生きる平成の日本人はいかに生きるべきか等について講演した。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、古田氏が「しくみの転換期」としての明治と平成の共通性に触れ、容氏は元留学生の立場から日本から何を学ぶべきかを語り、4名の留学生も会場からディスカッションに参加して意見を述べた。

近代アジア交流史には共生の模索から侵略の拡大まで、様々な側面が混在しているが、21世紀に向けて日本はアジアとどう付き合えばよいのか。「明治の日本人」のアジア交流経験をふりかえって「平成の日本人」はアジアとの新しい付き合い方においてどのようにあるべきか、について活発な議論が展開された。



松本 健一氏  
Mr. Matsumoto Ken-ichi



古田 元夫氏  
Professor Furuta Motoo



容 應 萸氏  
Ms. Yung Yingyue



小島 朋之氏  
Professor Kojima Tomoyuki

## イスラーム宗教讃歌コンサート

日 時：9月28日（土）午後7時～9時  
場 所：福岡銀行本店大ホール  
参加者：約600名

- 1 タイトル 「カッワーリーの神髄」
- 2 出演者 ファルーク・アリー・ハーン（ヌスラット氏の弟）、ラハット・アリー・ハーン（ヌスラット氏の甥）他8名のグループ
- 3 演奏曲目
  - アッラー・ファー, アッラー・ファー  
(ハムド：アッラーをたたえる讃歌)
  - この恩恵を何と感謝すればよいだろうか  
(ナート・シャリーフ：予言者ムハンマドへの讃歌)
  - 息をするたびにアリーの名がでる  
(正統第4代カリフでムハンマドに次ぐ予言者とたたえられているハズラット・アリーへの讃歌)
  - 恋人が我が家に訪れた  
(パンジャープの中世神秘主義詩人ブッレー・シャー作の恋歌)
  - 有名なパンジャープの聖者バーバー・ファリードをたたえる讃歌
  - 目から涙がこぼれ落ちる
  - マスト・マスト・カラングル  
(陶酔遊行聖者ラール・シャハバース・カラングルをたたえる讃歌  
パキスタンでも最も有名なメロディの一つ)
  - ラール・シャハバース・カラングルをたたえる讃歌

### Islamic Mystic Song Concert

Date: 7:00-9:00pm, Saturday September 28, 1996  
Venue: Fukuoka Bank Hall  
Approximately 600 audience

1. Title "Soul of Qawwali"

2. Musicians

Farrukh Fateh Ali Khan (Mr. Nusrat's younger brother)  
Rahat Ali Khan (Mr. Farrukh's son) and eight other accompanists

3. Program

*Allāh hū, Allāh Hū*

[Allah Hoo, Allah Hoo]

A song in praise of Allah in the Hamd style

*Is karam kā karū shukr kaise kaiase adā*

[How Can We Thank Prophet Muhammad for the Benefit He Provides with Us]

A song in praise of Prophet Muhammad in the Na't Sharif Style

*Maulā Alī*

[Every Time I Breathe, I Utter His Name, "Alli"]

A song in praise of Hazrat Ali, son-in-law of Prophet Muhammad

*Merā piyā ghar āyā*

[My Sweetheart Visited My House]

A love lyric by Bullhe Shah, a medieval mystic poet in the Punjab

*Ganj-e Shakar, merā Ganj-e Shakar*

A song in praise of Baba Fariduddin, a famous saint in the Punjab

*Akhiyā udik diyā*

[Tears Are Falling from My Eyes]

*Mast mast Qalandar*

[Mustt, Mustt]

A song in praise of the ecstatic traveling saint, Lal Shahbaz Qalandar

*Dam-ā-dam mast Qalandar*

A song in praise of Lal Shahbaz Qalandar. One of the most famous melodies in Pakistan



ファルーク・アリー・ハーン氏  
Mr. Farrukh Fateh Ali Khan



ラハット・アリー・ハーン氏  
Mr. Rahat Ali Khan

